

の木坂第二維持会会長で元八雲小の梶原先生も、強く引っ張って行って下さいました。ああいう方がいないとまとまりができませんでしたね。

小杉 司会 住区設立に向けた、そういう声がかんたん集まっていき、設立総会までいったんです。設立までの苦労話がありましたら聞かせてください。

岡田 まちづくり(住区)の趣旨を広めようということで、設立前に広報部会を設立し、「住区だより」をだしました。

太田 住区だよりができる1年前から前川正男さん(初代広報部部会長)を中心に広報部会はやっていました。住区ができるまで、それから5年かかっています。あわせて6年の準備の経過があったと思います。当時は、「みんなの明るいまちづくり、やくも住区だより」といいました。

八雲小学校の通学区域の範囲で明るいまちづくりをしていく組織で、6つの町会をはじめ住民のみなさんが、自分達の街を主体的に見直そうという点が重要なポイントだったと思います。

司会 住区だよりには、八雲のシンボルマーク(注:コラムA)がありますが、どのような経緯でできたんですか。

岡田 太田さんが、シンボルマークなどの仕事をされていると聞いて、住区にもあったほうがいいねってことでお願いしました。本当にいいマークです。非常口のマークも太田さんのデザインです。

太田 それからず〜っとこうして使われていることは、本当にありがたく思っています。

司会 機が熟すまで、他住区に比べ8年もの長い時間がかかったのが、



大坂 義郎

コラムA 八雲住区の宝物シンボルマーク

毎号「やくも住区だより」の冒頭を飾る、八雲住区のシンボルマークは、住区草創期にご活躍いただいた元広報部部会員の太田幸夫氏の作品です。

八雲の住区マークは、2つの家を形づくる線が交差しながら人体を構成し、同時に隣接する3棟の家並みを形づくっています。それらの太い線は、切り離れつつ接近しており、全体としての「まちづくり」に不可欠な、構成員としての協力と協調の意志を表しています。頭部の2つの黒丸は未来を見つめる目です。

太田氏は、座談会にも出席されていますが、現在、多摩美術大学教授、日本サイン学会会長、NPO法人サインセンター理事長、(株)DIGITAMAの代表取締役社長などの要職についています。

下のマークは、皆さん日常に目にされるマークですが、これも太田氏の作品です。全国で使われている非常口を示すマークで、国際規格に推されています。伝えたいことを形にして、見るだけで意味がわかるピクトグラム(絵文字)は、いまや言葉の壁を乗り越える為にも不可欠なものです。自動車、カメラ、家電、事務機器、公共施設案内サイン、天気予報など、私達の暮らしの中には、たくさんのピクトグラムが使われていますが、太田氏はその分野の(サイン)デザインの権威で、作品は国際的に採用されています。氏が仕上げた非常口サインのピクトグラムは、シンボルマークの国際規格になっています。



太田 幸夫

八雲住区住民会議発足

八雲住区住民会議設立



昭和60年(1985)12月7日

初代会長の故益戸忍氏の就任挨拶。8年の歳月と49回の会合を経て遂に誕生した。(八雲小学校にて)



写真で見る歩み

住区まつりが始まる



昭和61年(1986)10月5日

区民まつりの一環として実施。会場となった水川神社には大勢の人が集まった。